

ゼミと卒業論文のこと

N B

ひとつひとつ振り返るのがむずかしいくらい、この1年間のゼミで私はいろいろなものに出会った。なかでもシュヴァンクマイエルのいう「不正操作」と、オブジェの概念、この2つは私に大きな影響を与えた。

いま思えば、3年ゼミのおわりにおこなわれたプラハ～ドレスデン～マイセン～ベルリン～パリへの海外ゼミ合宿、あれこそが、外からの「不正操作」への反発のはじまりだったかもしれない。まわりが就活だのなんだのと慌ただしくしているあいだ、それとはかけはなれた広い世界で生きる　これが旅なのかと、プラハやパリの町をひとりさまよいながら、私は感じていた。

その感覚は、卒業論文で扱うことになったマン・レイの、『思想に対する物質の優位』という写真作品のよびおこす感覚ともつながっていたのではないか、と思える。旅は帰国によっておわることなく、その後もつづいて、シュヴァンクマイエルの映画、マン・レイの写真、ユイスマンスの小説、オブジェや石のコレクション、アンティエ・グメルスの絵、桑原弘明のスコープ作品、軽井沢合宿での講義や団欒、教授の作品である魔術的な料理、お菓子やマテ茶、切手、劇団唐組の紅テント、メヒコ、タルコフスキー、カレル・ゼマン、マル秘表現リスト、ひらがなの活用、そしてハスの妖精……と、いろいろなものにつながっていった。

私にとって1年間、いや3年次からつづく2年間のゼミは、まさにオブジェの連続する映像のような記憶をのこした。先日やっと提出することのできた卒業論文も、そのためだけに用意された知識の寄せあつめではなく、ゼミの旅を通じて出会うさまざまなものが自然とつながりあってできたのだものだと思う。

卒論でマン・レイのモード写真について書きはじめたはずなのに、気がつけば『惑星ソラリス』の複製のテーマにつながり、桑原弘明のスコープの光と影につながっていたことは、自分でも予想外の展開だった。「言葉は自分の所有物ではない」。あらためて、そうか！

それにしても、卒論の制作に自由を感じるという体験は、学部での生活のなかでも、もっとも貴重なことのひとつだったように思う。モード写真を研究したいとまず思いついた段階では、何をどうすればいいかわからなかった。そんなときに教授からマン・レイの名前をあげられたことで、それまで見えなかった世界が一気にひろがり、自由に書きはじめることができた。

なによりも、いまやりたいことをやっている、という感覚がとても気持ちよかった。

卒論も提出期日がせまるころ、幾度となく壁にぶつかった。まわりとくらべて進行の遅いことを気にしながら、行きづまっていた私は、「とにかく書きはじめること、誰かとくらべたりまねをしたりする必要はない、たとえいま（年末！）4000字しか書いていなくても、きっと書けるという根拠のない自信が必要、北島マヤの気分で、自分が天才であることを知らないバカになるのがいちばん」といったような教授の言葉に励まされて、ふたたび自由に書きはじめることができた。

いったいこの論文はどこへむかうのか。ただひたすら指先が無心に動いているとき、この身体はいったい誰のものなのか。文章を書きながら体がばらばらになる感覚を味わったのは、このときがはじめての体験だった。

そんなふう書きすすめているあいだ、これまで見たものや体験したことがしだいにつながって見えてくることに気づき、そこでまた、ひとりで幻想の旅に出ることもしばしばだった。たとえばマン・レイの『手』という作品から、ブニュエルの映画『皆殺しの天使』の体から切断さて動く手を思いだしたり、写真『カトリーヌ・ドゥヌーヴの肖像』のイヤリングから、3年ゼミの映画上映で見た『冒険者たち』のレティシアのオブジェのイヤリングを思いだしたりと、これまでの体験はいつも時空をこえた旅をさそうものになった。

こうして卒論を書いていくうちに、大学院進学への意欲もどんどん高まっていた。そういえば3年ゼミでランボーの詩を読みながら、感覚（Sensation）の旅を予感していたこと　あれがすべてのはじまりだったのか！と感じられもする。

ようやく卒論を提出したあと、授業としてのゼミもおわってしまった。けれどもこれから何かがはじまるのだという気がする。そんな予感をはらむゼミは、いままさに「ゼミ」へと変化し、社会・世界へとひろがりつつあるのだろう。

情報でものごとを判断して結果ばかり求める「思考の化け物」（『時の支配者』）にはならないように、私はこれからも「不正操作」に反発しつづける。